

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(設問に字数制限のある場合は、句読点や符号も一字と数えます。)

「 I 」

①朝の通学路で、盛田美央は思わず目をとじた。火山灰が入ったのだ。桜島の火山灰。海のむこうにある桜島は活火山で、ときおり噴火しては火山灰をまきちらす。夏になると、その火山灰が風によって、美央の住む街にやってくる。

美央は立ちどまり、ハンカチをだして、両目を **A** こそすった。涙が灰を流して、痛みはおさまったが、

「 II 」

②こんどは、ひらいた目がまるくなった。目の前に大きなポスターがあらわれたのだ。まさに、あらわれたという感じ。さっきまではぜんぜん気がつかなかった。

ポスターは、通りむこうの家のへいに貼ってあった。そこを曲がれば、小学校というところ。

「 III 」

美央はすいよせられるように、ポスターに近づいた。

ドリーム・サーカス。

そう大きく書いてある。ポスターには、空中ブランコや綱わたり、ピエロや動物たちの写真がちりばめられていて、その真ん中には、英国紳士みたいな服を着た男の人が、白い犬をだいて立っていた。

「さあ、どうぞ。」

と、招きいれるみたいに片手をあげて。

「マジックを超えた魔法をあなたに。」

美央は、ポスターに書かれていた文字を読んでみた。

サーカスがくるんだ。

ちょっと胸がはずんだとき、

「美央ちゃん。」

③名前をよばれて、ぎくりと背中がのびた。おそろおそろふりかえってみる。

わっ。

美央はあげそうになった声を、すばやくのみこんだ。やっぱりめぐちゃんだった。同じクラスの吉崎めぐちゃん。

「美央ちゃん、つづり持ってきた？」

「 IV 」

つめよられて、美央は **B** 後ずさった。

めぐちゃんがいつているのは、テストつづりのことだ。美央のクラスでは、かえてきたテストを、厚紙のファイルにとじていくことになっている。厚紙には、印鑑をおすためのマス目がプリントしてあって、家の人から「見ました」の印鑑をもらうことになっている。

めぐちゃんは、つづりをあつめる係なのだ。

「よく忘れるからこまるんだよね。」

めぐちゃんは、太い声でいった。それでなくてもめぐちゃんは体が大

きいので、美央は二倍に責められているような気持ちになった。登校していく人たちが、**C** 視線をよこすのものはずかしい。

心臓がおかしなふうにはじめめて、

「たぶん持ってきた、と、思う。」

美央は、いい加減に返事をした。逃げるようにその場を後にする。

④どうしよう。

めぐちゃんに追いつかれないように小走りしながら、美央は背中のレストランがずんと重たくなるのを感じていた。たぶん、つづりのせいだ。ランドセルの中に入っているテストつづりには、「見ました」の印鑑がない。

四十三点。

きのうかえてきた算数のテストはさんざんだった。平均点より三十点も下だ。⑤こんな点数をお母さんに見せたら。その先は、考えただけで、胃袋の裏側あたりが重たくなった。重たいおなかをなでているうちに、きょうになってしまったのだった。

算数は低学年のころから苦手だったが、このところ、とくにむずかしくなっている。算数だけではない、教わる漢字の画数は増えたり、五年生になって社会科や理科の教科書も、ぶあつくなった。このところ、かえてきたテストを見せるたびに、

「美央はちゃんと中学生になれるかねえ。」

お母さんは、ため息まじりの声でいう。だから美央は、自分でも心配になってしまう。

教室でテストつづりを集めるとき、忘れたことをいうと、めぐちゃん

は「やっぱりね」というように、首をすくめた。⑥けれど、強く注意されることはなかった。ほかにも忘れた人がいたし、なにより同じクラスの亜美ちゃんが、いいニュースをもってきたからだ。

「きょうは体育館をつかえるんだって。」

亜美ちゃんは、六年生からきいてきたみたいだった。

美央の学校では、五年生になるとクラブ活動の時間がはじまる。美央はバレーボールクラブに入っているのだが、体育館をつかえる日は少ない。ミニバスケットや卓球や、体操クラブなど、体育館をつかうクラブがたくさんあって、順番がなかなかまわってこないからだ。

つかえないときには、運動場のはじっこにあるコートで練習するのだが、火山灰が目に入ったり、ボールや服についてよごれたりして、やりにくい。体育館のほうが、だんぜん調子が出る。

「やったあ。」

だから亜美ちゃんからの情報に、美央もジャンプしてよろこんだ。

美央はバレーボールが好きだった。最初は自信がなかったものの、やってみると案外じょうずにできた。サーブはちゃんと相手コートまでとどくし、このあいだ、はじめてしてみたスパイクもうまくきまった。相手チームにいためぐちゃんがはじめてしまい、くやしがついていた。

⑦頭のなかにバレーボールのことがふくらんだ分、つづりのことが小さくしぼんだのか、美央の気分は楽になった。

(まはら三桃『青がやってきた』による。)

問1 I IⅣ にあてはまる発言として最も適切なものを、それぞれ次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

- ア こんなのがあったっけ？
- イ え、あ、ああ。
- ウ いたった。
- エ あれ？

問2 ①朝の通学路で、盛田美央は思わず目をとじた。火山灰が入ったのだとありますが、火山灰は目に入る以外にどんな被害がありますか。それを説明した次の文の A B にあてはまることばを、文中から指定の字数で探し、それぞれ書きぬきなさい。

運動場で練習していると、 A (五字) について B (五字) するという被害。

問3 A C にあてはまることばとして最も適切なものを、それぞれ次のア～オの中から選び、その記号を書きなさい。

- ア ぎらぎらと
- イ ごしごしと
- ウ じわじわと

問6 ④どうしよう とありますが、美央はなぜ困っているのですか。その理由を述べている一文を文中から探し、最初の五字を書きなさい。

問7 ⑤こんな点数をお母さんに見せたら とありますが、何と言われると考えられますか。十七字のことばを文中から探し、最初の五字を書きなさい。

問8 ⑥けれど、強く注意されることはなかった とありますが、めぐちゃんが強く注意しなかったのはなぜですか。適切ではないものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

- ア 亜美ちゃんが持ってきたニュースを聞いて機嫌が良かったから。
- イ どうせ美央はテストつづりを忘れていると予想していたから。
- ウ ほかにも忘れた人がいるから美央だけ責めても仕方ないから。
- エ 朝会ったときに大きい声で責めたのを少し反省していたから。

- エ たじたじと
- オ ちらちらと

問4 ②こんどは、ひらいた目がまろくなった とありますが、なぜですか。それを説明した次の文の A B にあてはまることばを、文中から指定の字数で探し、それぞれ書きぬきなさい。

全く A (八字) ポスターが目に入ってきたので、ポスターが急に B (五字) ように感じられておどろいたから。

問5 ③名前をよばれて、ぎくりと背中がのびた とありますが、それはなぜですか。最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

- ア 子どもっぽいところを他人に見られてしまったと思ったから。
- イ せっかくのサーカスの秘密を知られてしまったと思ったから。
- ウ 今は会いたくないめぐちゃんに声をかけられたと思ったから。
- エ テストつづりを持ってくるのを忘れてしまったと思ったから。

問9 ⑦頭のなかにバレーボールのことがふくらんだ分、つづりのことが小さくしぼんだのか とありますが、これはどのようなことを表していますか。最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

- ア 得意で好きなバレーボールが体育館でできると知ってうれしくなり、悪い点数をお母さんに見せて印鑑をもらわなければいけない憂鬱を忘れられた。
- イ 運動場のコートではなく体育館でバレーボールができると知って楽しみになり、持ってくるのを忘れたテストつづりを家に取りに帰る面倒くさを忘れられた。
- ウ めぐちゃんがぐやしがるくらい自分の方がじょうずなバレーボールができることがうれしくて、テストつづりのことをめぐちゃんから責められたくやしさを忘れられた。
- エ 最初は自信のなかったバレーボールがじょうずになった楽しさを思いだして、テストの点が悪くて中学生になれるかどうか心配していたことを忘れた。

問10 本文を二つに分けたときの、二つ目の最初の五字を書きなさい。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(設問に字数制限のある場合は、句読点や符号も一字と数えます。)なお、(※)は作問者の注です。

「こんな自分、イヤだ」

そんな思いが込み上げてくることがあるだろう。だれにでもあることだ。今の自分に納得がいけない。

小さい頃は、そんなことはあまり思わなかったはずだ。もちろん、苦手なことはあっただろう。たとえば、球技が苦手だなど思ったり、引っこ込み思案で友だちづきあいが下手な自分を意識したりすることもあっただろう。でも、自分が嫌いだとか、自分がイヤだなんて思うことはあまりなかった。それなのに、最近では、「自分がイヤだ」と思う。①青年期になると、そんな思いを抱きがちだ。

自分がイヤだと思うようになるのは、自分がだらしなくなったとか、ダメになってきたということではない。言ってみれば、「見られている自分」がダメになってきたのではなくて、「見ている自分」が成熟してきたのだ。自分自身を厳しい目で見るようになったために、自分の現状に納得できなくなったというわけだ。

ある意識調査によれば、小学五年生に「自分のことが好きか」と尋ねると、半数以上が「好き」と答える。「嫌い」というのは一割にも満たない。だが、中学三年生では、「好き」が三割程度に減り、「嫌い」が二割に増える。同じく小学五年生に「自分に満足か」と尋ねると、半数以

上「A」と答え、「B」というのは一割を満たない。ところが、中学三年生では、「C」が二割と大幅に減り、「D」が半数近くになる。

E、児童期には自分が好きで自分に満足していたのに、青年期になるにつれて、自分が嫌いという人が増え、自分に不満という人が急激に増えていく。このことは、まさに自分を見る目が厳しくなってきたことの証拠といえる。②自分に對する要求水準が高まるため、なかなか自分の現状に納得できないのだ。

ただ何となく生きてきたのが児童期だとすると、青年期になると「こ

うりたい自分」というものを意識するようになる。それを「理想自己」という。現実の自分を「現実自己」という。児童期には現実自己をただひたすら生きていた。F、青年期になると、理想自己というものを思い描くようになり、現実自己を理想自己と比較するようになる。そこで、理想自己にまだまだ届かない現実の自分を意識せざるを得ないため、自分に満足しにくくなるというわけだ。

理想自己の形成には、青年期になるとG的思考ができるようになることが関係している。そのため、具体的な行動と結びついた理想自己だけでなく、H的な価値観と結びついた理想自己もつようになる。

I、「日曜日は野球をして遊びたい」「サッカーがもっと上手になりたい」「テストでもっと良い成績が取れるようになりたい」と

す自分が気になってくる。

そんな不快感(※十分な働きをしていないという感じ。状態が不完全であるという考え)を抱えた状態は、けっして気分の良いものではない。方向性を見つけて、こんな苦しい状態から何とか脱したい、早くスッキリしたいと思うかもしれない。でも、今の自分に納得がいけないからといって、自分を否定する必要はない。

自分の二重性を思い出してみよう。「見られている自分」に対して納得のいかない「見ている自分」がいるわけだ。その「見ている自分」は、適当に流されている自分にも不満をもたなかった以前の自分と比べて、はるかに向上心に満ちた自分と言えるだろう。そんな自分は、けっして否定すべきものではない。⑤むしろ肯定し、応援すべきなのではないだろうか。

(榎本博明『へ自分らしさ』って何だろう?』による。)

問1 ①青年期になると、そんな思いを抱きがちだ。とありますが、それはなぜですか。最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

- ア 「見られている自分」がダメになってきていることを、厳しい目で見られるようになってきたから。
- イ 「見ている自分」が、適当に流されている自分に不満を持つぐらい成長してきたから。

③具体的な目標と違って、このような抽象的な目標になると、その達成のためにどうしたらよいかかわからない。

日曜日に野球をして遊びたいというのであれば、ふだん野球を一緒にしている仲間と声をかければよい。サッカーがもっと上手になりたいのなら、時間をつくって練習に励めばよい。いきなり上手になるわけではないけれど、練習をすればするほど少しずつでも上達していくはずだ。テストでもっと良い成績を取りたいなら、試験勉強をしっかりやればよい。すぐに報われるとは限らないが、地道に勉強することができれば、着実に成績は向上していくだろう。このように、具体的な目標の場合、そのために頑張るべき方向性は明確だ。

抽象的な目標の場合はどうだろう。もっと自分に自信をもてるようになるためには、いったいどうすべきなのか。退屈な日々から脱するため、できることって何だろう。生きているっていう実感を得るために、果たして何をすべきなのか。いくら考えても、なかなか答えは見つからない。

今の自分にどこかJ。でも、どうすればよいのかわからない。ここに産みの苦しみがある。④第二の誕生という課題を前にして、どんな自分になったら納得できるのかが見えてこない。そこで、まずは

ウ 「見られている自分」が成長してきたことを「見られている自分」は認められないから。

エ 「見ている自分」が成熟してきたので、だらしなくなった自分に我慢できなくなったから。

問2 A D には、「満足」か「不満」かの、どちらかのことばがあてはまります。その組み合わせとして最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

- ア A 不満 B 満足 C 不満 D 満足
- イ A 不満 B 満足 C 満足 D 不満
- ウ A 満足 B 不満 C 不満 D 満足
- エ A 満足 B 不満 C 満足 D 不満

問3 E F I にあてはまることばの組み合わせとして最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

- ア E このように F そして I または
- イ E あるいは F ところが I または
- ウ E このように F ところが I たとえば
- エ E あるいは F そして I たとえば

A(四字)とB(四字)を一致させるという課題。

問9 ⑤むしろ肯定し、応援すべきなのではないだろうか とありますが、何を肯定し、応援すべきだと筆者は考えていますか。それを説明した次の文の A B にあてはまることばを、文中から指定の字数で探し、それぞれ書きぬきなさい。

「こうありたい自分」になるという、 A(七字) 目で自分を「 B(六字)」。

問10 本文の内容として正しいものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

- ア 児童期には自分がイヤだと思うことは少ないが、引っ込み思案で友だちづきあいが下手な自分を意識することがある。
- イ 児童期には「こうありたい自分」というものを全く意識することなく、現実の自分だけをただひたすら生きている。
- ウ 青年期には簡単に答えが見つからない目標を持った結果、みな自分が理想に届かないことになりがちになってしまう。
- エ 青年期には産みの苦しみを味わいながらも努力しているうちに、今まで抱えていた不全感は自然と消えていく。

問4 ②自分に対する要求水準が高まる とありますが、「要求水準が高まった」「自分」のことを何と言いますか。文中から五字以内で探し、書きぬきなさい。

問5 G H には、同じ二字熟語があてはまります。文中から探し、書きぬきなさい。

問6 ③具体的な目標と違って、このような抽象的な目標になると、その達成のためにどうしたらよいかかわからない とありますが、具体的な目標の場合はどうなりますか。それを説明した次の文の [] にあてはまることばを、文中から指定の字数で探し、書きぬきなさい。

目標のために (八字) がはっきりする。

問7 J にあてはまることばを文中から七字で探し、書きぬきなさい。

問8 ④第二の誕生という課題 とありますが、これはどのような課題ですか。それを説明した次の文の A B にあてはまることばを、文中から指定の字数で探し、それぞれ書きぬきなさい。

③ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(設問に字数制限のある場合は、句読点や符号も一字と数えます。) なお、著者の小林深雪氏は、埼玉県出身です。

「どこか、見たいところある?」

① 心が弾んだ。
高校の廊下を歩き出す。涼太さんとふたりで並んで歩いているだけで、

「あ、じゃあ。美術部の展示が観たいです」
「へえ、美術が好きなの?」

「はい。わたしも美術部なんです。もうすぐ、文化祭だし」
「中学の美術部でも展示をするの?」

「展示と、あと似顔絵を描くんです」
「へえ、描いてもらいたいな」

「ほんとはですか? ぜひ、来てください。わたしも涼太さんのこと、描きたいです!」
勢いこんで言うてから、はっとした。やだ、わたしってば恥ずかしい。

目を伏せながら、小声で続けた。

「コンクールの演奏を観たとき、描きたいって思ったんです。サクスを吹いているところがあまりにも絵になっていたから」

「ほんと? それは、テレルけど嬉しい。でも、絵はいいよね。いつまでも、あとに残るから」

涼太さんが優しく言った。

「音楽はその場で消えちゃうから。もちろん、②録音や録画っていう方法はあつたけれど、その瞬間は一度きりだから」

「でも、一度きりだから、消えてしまうから、いいんじゃないですか？」
「え？」

「いまだけがすべてっていうその瞬間が情熱になるから、魂がこもってすごい演奏になるんじゃないですか？ コンクールの演奏、とてもとてもよかったです。こんなに音楽が③身にしみていると感じたの、じつは生まれて初めてなんです。だから、今日も演奏会をすごく楽しみに来たんです。なのに、こんなめんどろなことを頼んでごめんなさい」

言いながら、なんだか泣きそうになってくる。

「音楽の授業で先生から無理やり聴かされる音楽は、ただただ退屈なんですけど、涼太さんの演奏はほんとにすごくよかったです。感動したんです。あのととき、手が痛くなるまで拍手したんです！」

涼太さんが、わたしの勢いに驚いたのか、ほかんとした顔をしている。

「やだ、わたし、なに言ってるんだらう。恥ずかしい」

わたしの頬が④かっとなつて熱くなる。

「あ、いや。ありがとう。嬉しいよ。ほんとに嬉しい」

涼太さんが頭を掻いて、テレてる。

「そんなこと面と向かって、ちゃんと言ってくれた人って、終子ちゃんが初めてだし」

「え？」

「ほんとありがとう」

問2 ②録音 と同じ組み立ての二字熟語を、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア 美術 イ 演奏 ウ 無理 エ 拍手

問3 ③身にしみて の使い方として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア 実家を出ると親のありがたさが身にしみて分かる。
イ 相手チームの勢いが身にしみてひるんでしまった。
ウ 役者の身にしみるような演技に感動して拍手した。
エ この料理のおいしさは彼の身にしみているだろう。

問4 ④かっとなつて と同じ動きをしていることばを、次のア～オの中から二つ選び、その記号を書きなさい。

ア よく磨かれた床でつるつるとすべってしまった。
イ かなづちを使ってとんとんと釘を打ち付けた。
ウ 水滴の落ちるびちよんつという音が聞こえてきた。
エ 飛んできたハエをばちつとたたこうとした。
オ 人の多さに部屋の中の空気はむっとなつていた。

⑤真剣で誠実な瞳だった。
会話がふつと途切れて、言葉のかわりに、ふわりとふたりの魂が近づいたような気がした。

マグリットの絵や、お気に入りのシャツ、倉敷のあの風景、一目見ただけで、そうそう、わたしが探していたものは、これだったのよ！
ていうあの感覚。

でも、もしかしたら、わたしがいちばん探していたのは、こんなふう
に、わたしの言葉に反応してくれて、どきどきさせてくれる、たつたひ
とりの男の子なのかもしれない。

胸がどきどきして、止まらない。頬が熱い。きゅんと胸がしめつけられて苦しい。

もしかして、これが……これが。
これが、恋なの？

(小林深雪『エアカレ』による。)

問1 ①心が弾んだ と同じ意味の慣用句を、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア 目から火が出た
イ 心が晴れた
ウ 胸が高鳴った
エ 心臓が強かった

問5 ⑤真剣で と同じ品詞のことばを次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア 廊下 イ 嬉しい ウ 頼んで エ 誠実な

四

次の問いに答えなさい。

問1 次の①～⑤の文の主語と述語の関係は、あとのア～ウのどれにあてはまりますか。それぞれ記号を書きなさい。同じ記号を何回使ってもかまいません。

- ① うちのネコは見た目も可愛く性格もおだやかだ。
- ② あの日のことは決して忘れられない思い出だ。
- ③ 大雪が降った次の日、庭は一面に白くなった。
- ④ これは裁縫上手な母が作ってくれた洋服です。
- ⑤ ぼくの姉はこの春、社会人として働き出した。

- ア わたしが目指している家の屋根は赤い。
- イ わたしは赤い屋根の家を目指している。
- ウ わたしが目指しているのは赤い屋根の家だ。

問2 次の①～⑤の文の——線の語がかかることばを、ア～オの中から一つ選び、それぞれ記号を書きなさい。

- ① 姉はいつも 高校の 図書室で 勉強を している。
- ② ずっと 昔、たぶん わたしが そう、言ったのだろう。
- ③ 今日の おやつは ぼくの 好きな 手作りの ケーキだ。

- ④ 今年も 運動会の 応援に 妹と 弟が 来た。
- ⑤ これから 兄同様に ぼくも 多くの 本を 読もう。

五

次の①～⑤のことわざの意味を、あとのA・Bのことばを組み合わせ、て完成させ、それぞれ記号を書きなさい。

- ① 人のふり見て我がふり直せ
- ② 井の中の蛙大海を知らず
- ③ 朱に交われれば赤くなる
- ④ ちりも積もれば山となる
- ⑤ 情けは人のためならず

- A 自分の身の回りのことしか知らないで
- イ 人にした親切はめぐりめぐって
- ウ 他人の良いところや悪いところをよく見て
- エ どんなに少しのものでも積み重ねれば
- オ 付き合う相手によって
- B 自分のためになるから人には親切にするべきだ
- イ やがては大きなことが達成できる
- ウ 人は良くもなるし悪くもなる
- エ もっと広い世界があることを知らないこと
- オ 自分の行いを反省するべきだ

六

次の①～⑩の文の、——線をつけた漢字はよみがなをひらがなで、カタカナは漢字に直して書きなさい。

- ① 山々が連なっている。
- ② 画一的な建物が並ぶ。
- ③ 山奥に湯治に来た。
- ④ 専ら虫ばかり調べている。
- ⑤ 賛否両論がある。
- ⑥ 金庫にキチヨウ品を入れる。
- ⑦ 生存キョウソウに勝った生き物。
- ⑧ 線をスイチョクに引く。
- ⑨ 畑の土がよくコえている。
- ⑩ 規則にモトづいて判断する。

【この問題は終わります】

